

大東京百景

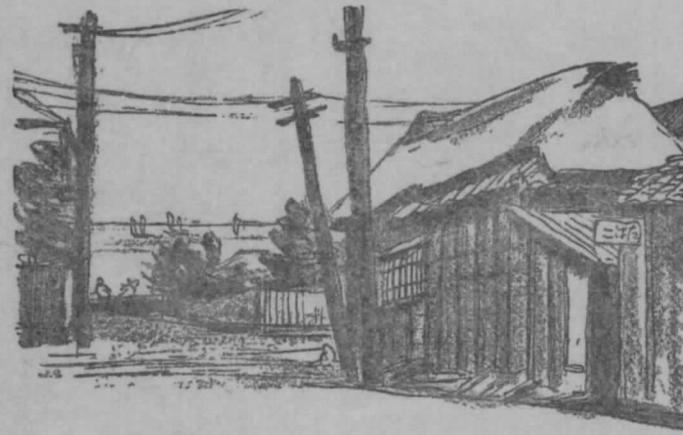


大東京百景 目次

足立區	稻伊之助氏	荏原區	木村莊八氏
千住中組 舍人村 西新井大師		武藏小山 小山から戸越へ 荏原區展望	
赤坂區	矢島堅士氏	大森區	足立源一郎氏
神宮外苑競技場 同アール 乃木大将舊邸		大森見段 東園布 池上洗足	
浅草區	小林徳三郎氏	王子區	中川一政氏
隅田公園 レグリ 深夜の公園		葛飾區	森田恒友氏
麻布區	小林徳三郎氏	蒲田區	森田恒友氏
瓦斯タンク 板橋遊廓 大谷口の塔	稻伊之助氏	羽田矢口	足立源一郎氏
牛込區	中川一政氏	蒲田 ニコライ堂 鈴木切 柴又	
神樂坂 水上クラブ	山崎省三氏	蒲田 御茶の水高女の候補地	
江戸川區	森田恒友氏	小石川區	横堀角次郎氏
葛西小岩 放水路		江戸川 江戸橋 不忍の池	
豐島區	矢島堅土氏	深川區	安井曾太郎氏
大塚驛 鬼子母神 日白驛		深川 江戸橋附近 日本橋 蒲河岸	有島生馬氏
澁野川區	林儀衛氏	本郷區	津田青楓氏
一里塚 田端驛 アトリエ町		本郷 星雲公園 澁野セメント工場 木場	木下義謙氏
龍野川區	矢島堅土氏	向島區	中川紀元氏
大塚驛 鬼子母神 日白驛		向島 吾妻町 隅田町 寺島町	横堀角次郎氏
中野區	小島善太郎氏	目黒區	橋本八百二氏
菅原堂 淺政賃油店前 塔の側		目黒 日黒駒馬場 大岡山	稻伊之助氏
淀橋區		中村研一氏	橋本八百二氏
文化住宅地 水道引水路			正宗得三郎氏
			武氏

628-48





大森界限（大森區）

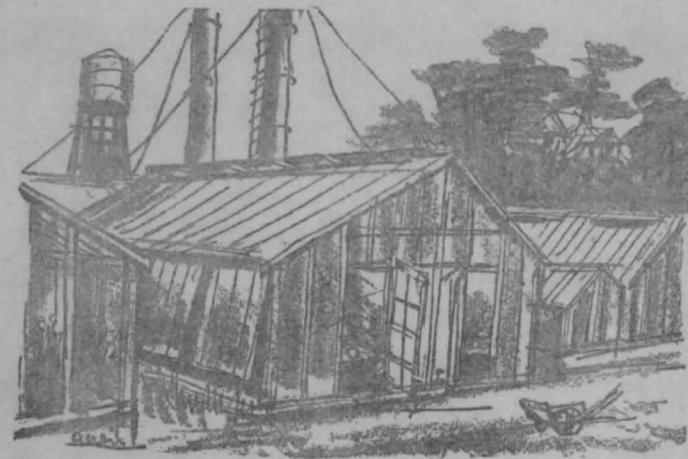
足立源一郎

城南の新東京で一番人口の多い區域、インテリの町大森も、さて見たところでは、何處にそれほどの人間が住むでゐるかと疑ふほどこんもりと繁つた若葉におはれつくしてゐる。

驛名の大森で呼ばれる様になつても、昔ながらの入新井宿が矢張り人工稠密の中心になつてゐるらしい。東京新市としての面目も先づこの驛の付近が代表してゐる。

ガードを潜つて大森銀座を郵便局の方へ歩く。鋪装路の両側には新装をこらした商店の飾窓が美しくつゞく。然し通勤時間を過ぎたせいか、初夏の光をまぶしく反射する路を、空っぽのバスが勢ひよく横行する。

行くほどに京濱国道の交叉點には、小さい漁港の屋根が燐銀色の海を背景にして散在する。この漁師町の遺物が大して眼ざはりにならないほど磯の香の幾つた新市振りである。



東調布

(大森區)

足立源一郎

多摩川の臺地に建て並んだ調布の田園都市は、郊外住宅の見本市の様なところで、日曜日の午後などには、そうした樂しい計畫をもつ人達が、勝手な批評をしながら散歩してゐるのを見々見うける。然しづにのつて餘り深入しすぎると、電車の乗場へ戻る路の遠さをかこたねばならない。

臺地の裏には、丸子から二子まで今に續いて仕舞ふかと思はれるほど、一帯の低地をうづめた温室の硝子張りが、初夏の太陽をきらきらと照りかへしてゐる。大東京市民の眼と舌を悦ばす尖端がこゝにある。

川原の向ふ蓬がに富士の雪が輝き、木枯の吹きすさぶ頃には、閉ぢこめた硝子の内にスキートビーや薔薇の花が、鮮やかな色彩と甘い香を漫らし、クリスマスイブの卓を飾るトマトがつやゝかに實る。今は開けはなしの扉から、圓々と熟したマスクメロンの小さいハンモックに乗つた姿が食慾をそゝる。



倦怠
guenst

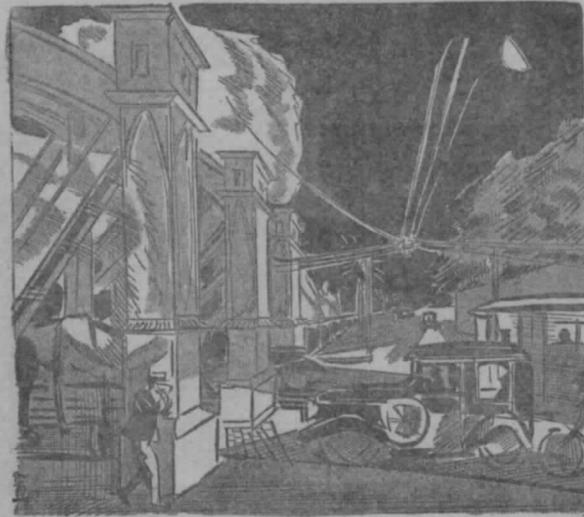
池上・洗足（大森區）

足立源一郎

大森區の中央部は一般に丘陵地帯で、地勢の變化に豊むである。馬込池上、洗足など起伏の多い野路は、玉蜀黍の赤毛が風になびく頃の散策に快よいところであつたが、今は縱横に切り開かれた新道に添つて、赤屋根青屋根が散在し、思ひがけぬ丘腹にヨルビュッフェー式の自喫館が明るい生活標を表示する。

然しこもながらに散策者の目標となるのは、黒々と繁つた本門寺の岡である。増上寺が失つた幽遊さをこゝはまだ完全に保留して、題目の太鼓を反響する。

本山の静寂さに引かへ、御舊蹟の一つなる洗足池は、現世草樂の尖端をゆくユートピアとして、トレコンフォルトな設備を急ぐ點、相當なものである。水郷ボラの三行廣告は少々下司だが、そこにまた相當な用途が發見されるらしい。この池を中心とした風景は新東京の景觀として恥ないものであらう。

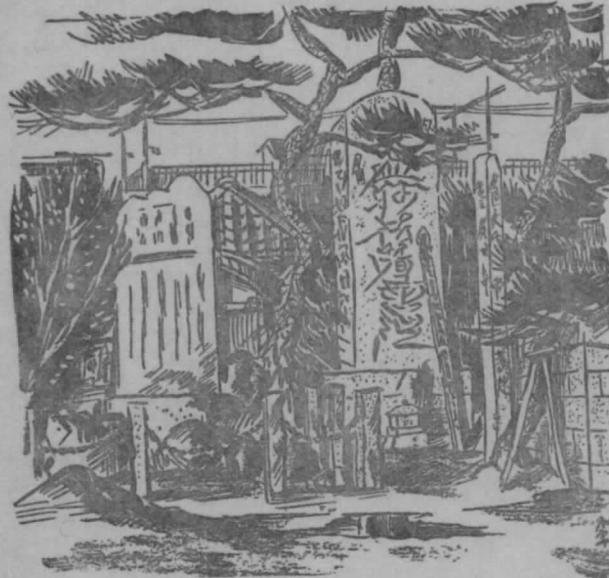


八ツ山陸橋

(品川區)

木村莊八

僕は品川區及び荏原區の探訪を命ぜられたので、定石の通り先づ國の陸橋のところへ行つて見たけれども、折柄とつぶりと暮て了つて、見上げる空には深い形ちに轟た黄いろい月が在つた。これが鈴ヶ森なら昔は今夜は一人歩きはいけまい。
職掌柄、どつちみち輸を一枚描かなければならぬので彼之と迷はうより橋を描したのであるが、これはあすこの向つて左手の欄干の一端に寄かゝりながら見た景観で、圖の右を遠見に暗がりへ消を込む道は、遠くは洗足池あたり迄打續く立派な鋪装道路で、近くは御殿山へこれから登つて行く。——ところが、時間のせいもあつたゞらうが、人つ子一人通らないのである。
人つ子一人通らないのはこの鋪装道路だけではなく、こつちの陸橋も亦人つ子一人通らないのである。云ふのが、歩いて此の橋を渡る者は殆んど無いと云つていゝ。その代り始終乗りものゝ行つたり來たりすることは目が廻る程である「十分間に車の飛ぶ」と此通りのみにて七十五幅」ところの沙汰ではない。
橋の下は又絶えず省線が通つて、その度に阿鼻叫喚と云つて然るべき音響がする。それのみならず更に轟じく地響きを立てゝ汽車が通ると云ふと、一時此の橋の上は臭い煤煙に漆々と包まれて目も口も開いて居られなくなる。——第一回はこれに降参して引上げて來た。



鈴 森 (品川區)

木 村 莊 八

初會の渡石碑で、その裏に新江戸の街並みが描かれています。背景には、城郭や塔などの構造物があり、人物も見えてます。この絵は、明治時代の風景を表現したものです。



土藏相模（品川區）

木村莊八

八つ山の出はづれを歩行新宿とは如何にも街道筋の匂ひを残した名であるが、今や一方は鋪装堅固な京濱国道に扼され、海に面した方は埋立られて街となり、つい此の間まで観の取れたところをぱりぱり乗合バスが通ふと云つたわけで、下地つ子が「振りさけ見れば袖ヶ浦、沖に白帆や千鳥立つ」と唱つて見たり、或は狂歌江戸名所圖會に云、「やつ山の下を乗り行く四つ手観晝夜十二の時たまなく」こんな文献は、方丈記と同じ様に遠い感じがする。ところがその中にめ組の喧嘩此の方の土藏相模が、老さらばひながら、それでも腰簾の代りに入口をベンキ塗りのドアにして、二階の行燈はすつかり取拂つて總ガラスに改め、せめて表構への海鼠の壁と天水桶にいゝところを見せ乍ら頑張つて居るのは島崎が没落したと云ふ今日、歩行新宿を恨み多いものにする。

此日の探訪は雨だ。隣の引手茶屋の細い格子先に壽司の屋臺店が御詫への道具で湯てる圓梅は、按摩や御家人が出て來ても、このロケーションは相當成り立つ景色である。無論雨よりも雪の方が雅い。さうすれば往來のコンクリートを隱せる。



聖心女子學院（芝區）

山下新太郎

芝區白金三光町所在、聖心女子學院の表門です、
此學校は東京市内でも最も設備の整つた女學校で、
幼稚園、小學校、女學校更らにその上に高等専門部
があります。校長は歐州人の尼僧でその他多數の尼
僧が英語及び佛語を受持つて居られます。